

オリヴァ・クロムウェル研究の新動向

—伝記的研究と政治文化的研究—

岩井 淳

1 はじめに

2008年は、オリヴァ・クロムウェルの没後350周年であった。少しさかのぼると、1999年は彼の生誕400周年であった。1999や2008といった年に合わせるかのように、クロムウェル研究は欧米でも日本でも、かなりの進展を見せている。1990年代にB・カワードやP・ゴントの、2001年にはJ・C・デイヴィスの詳細な伝記的研究が登場した⁽¹⁾。これらにクロムウェル周辺の研究も加えれば、枚挙にいとまが無いほどの数となる。日本では、まとまったクロムウェル研究として、今井宏氏や澁谷浩氏の著作が知られていた⁽²⁾が、1999年10月に聖学院大学主催のシンポジウム「クロムウェルと現代」が行われ、同年、田村秀夫編『クロムウェルとイギリス革命』が、2007年には清水雅夫『王冠のないイギリス王 オリバー・クロムウェル』が世に問われた⁽³⁾。クロムウェル研究は、地味ながらも絶え間なく続けられていると言っていいだろう。

そして、2007年、コンパクトにまとめられたクロムウェルの伝記研究が17世紀イギリス史研究の大家ジョン・モリルによって上梓された⁽⁴⁾。この本は、限られた紙幅ではあるが、従来の研究に対して批判的な見解を披瀝しており、注目に値する。ケンブリッジ大学教授のモリルは、これまでピューリタン革命の画期性を否定する修正主義の代表的論客として知られていた。だが、最近の研究分野を広げ、イングランドを越えたブリテン諸島を対象とし、新たに「ブリテン革命」論を提起しており、単純に修正主義者とは言いがなくなっている⁽⁵⁾。

前述のクロムウェル研究が伝統的な政治史研究をベースとしているのに対して、近年では共和国の政治文化的研究とも呼べる新しい潮流が登場している。そこでは、絵画や風刺画、紋章、コインといった図像が資料として積極的に用いられている。従来、政治文化研究は、フランス史では絶対王政期や革命期において盛んに研究され、イギリス史でも16世紀を中心に凱旋入市式などの事例

に即して儀礼研究が進められてきた⁽⁶⁾。しかしイギリス史において、政治文化研究は静態的分析には適しているが、ピューリタン革命期のような動態的局面にはその応用が難しく、成果が乏しかったと言えよう。ピューリタン革命という出来事や新たに樹立された共和国が、政治文化的にどのような意味を持つのかは、従来あまり明らかにされなかつただけに、この新展開には注目すべき点がある。

新たに登場した研究とは、図像資料などの分析によって共和国の特質を政治文化的に明らかにした、1990年代のS・ケルシー、S・バーバー、D・ノーブルックらの研究である⁽⁷⁾。さらに2000年、ローラ・ノッパーズによって『クロムウェルを構築する』という、政治文化的なクロムウェル研究が著された⁽⁸⁾。彼女の著作は、クロムウェル研究で政治文化的な手法が用いられたというだけでなく、連続性を強調する修正主義的な政治文化研究を批判したという点で、特筆すべき内容となっている。現在、合衆国のペンシルヴェニア州立大学の准教授であるノッパーズは、もともとミルトン研究者で、1994年に王政復古期のミルトン研究を公にしている⁽⁹⁾。

以下では、最近のクロムウェル研究を代表するものとして、前半でモリルの伝記的研究を取り上げ、後半でノッパーズのクロムウェル研究を中心に政治文化的な研究を検討し、新動向を追いたい。そこに見られるのは、従来、修正主義と呼ばれた研究の中からクロムウェルの新たな特色を提示する方向が現れていること、他方、修正主義に批判的な研究であっても、その成果を部分的に取り入れるといった形で、双方から「修正主義」以後の研究が進められていることである⁽¹⁰⁾。クロムウェル研究の新動向を、伝記的研究と政治文化的研究から探ってみたい。

2 伝記的なクロムウェル研究

クロムウェルの没後350周年にあたる2008年の前年、コンパクトにまとまったクロムウェルの評伝がジョン・モリルによって上梓された。本書は、オクスフォード大学出版局から全20巻の予定で出版されているイギリス史上の重要人物の評伝シリーズの一冊をなす。著者モリルは、17世紀研究に携わる者ならば、知らない人がいないといっても過言ではない内戦史研究者である。彼は、「ピューリタン革命」と呼ばれる17世紀中葉の出来事を宗教的要因に基づく「内戦」として再解釈した修正主義の代表的論客である。彼の研究は多岐に及び、地方史研究からスタートしつつも、軍事史やスコットランド史に多数の業績を残し、

最近では内戦を、イングランド・スコットランド・アイルランドによる「三王国戦争」とするブリテン史研究に力点を移している⁽¹¹⁾。ただ特筆すべきは、モリルが「内戦」という名称を重視しながらも、「革命」という呼称を放棄せず、むしろ繰り返し用いていることである。思い起こせば、1993年に出版された彼の論文集のタイトルは、『イングランド革命の性格』であった⁽¹²⁾。クロムウェルに関して言えば、モリルは1990年に『オリヴァー・クロムウェルとイングランド革命』という論文集を編集しており、ここでも「革命」の語が使われていた⁽¹³⁾。

話をクロムウェル評伝に戻そう。モリルは、1990年以降に出版されたカワードやゴント、デイヴィスの伝記的研究を挙げた後、批判的なコメントを寄せている。「彼らは、同時代人の小冊子や個人的なメモワールの証言に対して、クロムウェルの自己表象という証拠に重きをおいている」⁽¹⁴⁾。そのため、彼らは、クロムウェルに厳しい同時代人の評価は軽視し、クロムウェルの手紙や演説といった「自己表象」に立脚して彼に好意的な像を描き出す結果となった。これに対してモリルは、クロムウェルに批判的な史料も用いて、比較的バランスの取れたクロムウェル像を提示しているように思われる。

本書は、本文132頁の小冊子である。だが、現在の17世紀研究に多大な影響を与える著者が、クロムウェル評伝という形で研究のエッセンスを凝縮したという点で注目すべきである。本書は、執筆の背景や謝辞を記した序文に始まり、第1章「無名からの立身, 1599-1642」、第2章「第一次内戦, 1642-1645」、第3章「幾多の駆引き, 1646-1647」、第4章「内戦と国王殺し, 1648-1649」、第5章「三王国への号令, 1649-1651」、第6章「安定の追求, 1651-1653」、第7章「護民官, 1653-1658」、第8章「幻滅と死」、第9章「没後の評価」、第10章「結論：神の真摯な下僕」というほぼ時代を追った全10章から構成される。

序文では、世界中でクロムウェルについて講演してきた著者が、「(たただ傘で)身体的に攻撃されたり、嫌がらせメールを受けたりした」というエピソードが紹介される⁽¹⁵⁾。クロムウェルを語ることは、時に現代的課題にもなり得ることが想起される。第1章は、誕生から内戦勃発までを扱い、史料が少ない中で、クロムウェルが没落しかかったジェントリの身分から庶民院議員として出世する様相を考察する⁽¹⁶⁾。第2章・第3章・第4章は、内戦中、東部連合軍やニューモデル軍の副司令官となって活躍しながら、政治家としては長老派との抗争に苦しめられ、苦渋の中で国王処刑に至るまでを描いている。彼の軍人として資質の高さや戦術面での優れた評価がなされており、モリルの軍事史研究の成果を生かした部分である。第5章「三王国への号令, 1649-1651」では、彼がイン

グランドのみならず、アイルランドやスコットランドを舞台とした戦争にも従事したことが指摘される。最近のブリテン史研究の一端が示され、本書の中でも注目すべき章であろう。第6章・第7章・第8章は、権力の座に着いた彼が護民官となり、急進派との対応や政局の混迷に苦悩しながら死を迎えるまでをたどっている。その中で「クロムウェルは名称以外では国王になった」⁽¹⁷⁾と評価される。第9章は、同時代から始まり、最近の研究に至るまでクロムウェル観の変遷をたどっており、研究史の概観という役割も果たしている。演劇や映画、テレビで描かれたクロムウェルのイメージも紹介しており、とても興味深い。第10章は、「クロムウェルは偉大な思想家ではなかった」が、「彼は、たとえ自身や他者に大きな犠牲を払っても、自分や自分の神に対しては非常に真摯であった」⁽¹⁸⁾と締めくくられる。

こうした内容の本書は、二つの重要な意義をもつと言ってよい。それは、第一に、コンパクトながらもバランスの取れた、非常に多面的なクロムウェル伝ということである。没後350周年を迎えるにあたり、彼の多彩な活動や足跡を一冊で知ることのできる好著を得たことを素直に喜ぶべきであろう。第二に、本書には、17世紀研究の第一人者が、これまでの軍事史研究やブリテン史研究の経験を生かし、それらのエッセンスをまとめることによって、最新の内戦史の成果が満載されている。17世紀の出来事を、「内戦」と見るか「革命」と見るかは意見の分かれるところであるが、最近の研究動向から学ぶことは不可欠の作業であろう。

本書は、以上の意義をもつ。それを十分に認めた上で、一つだけ気になった問題点を指摘しておこう。それは、本書が多面的であり、バランスの取れた冷静な分析を行なっているというメリットをもちながら、クロムウェルや17世紀の出来事の全体像が見えてこないという点である。著者は、クロムウェルが多くの人々の影響を受けながらも、「勸告者や主要な国務官僚が彼に与えた忠告によって、不本意ながらも、しばしば引きずられた」⁽¹⁹⁾と述べる。また、宗教的にも国教会の大主教からクエイカーの始祖ジョージ・フォックスに至るまで、彼に影響を与えた人物はあまた指摘されるが、クロムウェル自身の行動や思想の特色は、あまり明らかにされていない。

同じようなことは、クロムウェルのアイルランド征服にも妥当する。本書は、「クロムウェル＝ピューリタンの英雄」という従来のイメージに修正を迫っているが、他方で、「アイルランド征服の責任者」という見解にも与していないようである。著者は、アイルランドで非戦闘員が虐殺された地名を引き合いに出

し、「ドロヘダはクロムウエルの広島であり、ウェックスフォードは長崎であった。これらの大虐殺は、戦争を終結させたのではなく、ただの残虐行為であった」⁽²⁰⁾と述べる。ここから、クロムウエルのアイルランド征服は、広島や長崎への原爆投下と同じく、不必要な「ただの残虐行為であった」という批判的な見解が浮かび上がる。しかし、その直後で「結果としてのアイルランド植民および『クロムウエルの土地没収』に対する彼の個人的責任は、非常に不明確である」⁽²¹⁾と付け加えられることによって、クロムウエルの戦争責任はあいまいにされてしまうのである。

本書は、このような問題点をもっているが、基本的な価値は揺らぐことがないだろう。それは、コンパクトながらも、著者の長年の研究生活に立脚した豊富な情報を盛り込んでいる。著者が17世紀研究を代表する研究者ということもあり、本書は内戦史の全体像を知るための格好の入門書になっている。この本の主張に賛成するか否かは別として、クロムウエルやピューリタン革命に関心をもつ者が読まなければならない書の一つであろう。

3 政治文化的なクロムウエル研究

次に、ノッパーズの著作を中心に、政治文化的なクロムウエル研究を検討しよう。この本の目的は、次のようなものである。「本書は、変化する多様なオリヴァ・クロムウエルのイメージを構築するために、印刷文化が他の形態の文化と、どのように相互作用するかを追跡するものである。印刷物という存在は、オリヴァ・クロムウエルの表象におけるエリート文化と民衆文化の区別を掘り崩しながら、チャールズ1世時代の儀礼と肖像画を変質させた。印刷物は、風刺的なニュースとバラードの形で繰り返される版面版となった。君主的形態から領有された儀礼は、今度はニュース誌やパンフレット、目に見えるイメージ、印刷された詩句において競合し、解釈され、普及していった。公共圏に場を移すにつれて、クロムウエルのイメージは、宮廷の統制から民衆的印刷物の世界へと移行していった」⁽²²⁾。

ノッパーズは、クロムウエル時代の印刷物の特徴を、前後の時期と比較して次のように捉えた。「彼の前後の時代の君主たちと違って、クロムウエルは、彼自身のイメージ作成を厳しく統制しなかった。世俗的儀礼や肖像画は空位期でも存続したが、それらは、まとまりがなくなり、民衆化し、印刷物の中で改作された。民衆的印刷物は、商業的・政治的文脈において、クロムウエルのイメージを周辺から構築した。印刷されたテキストは、世襲や神権に基づかない新たな

な権威を表象するだけでなく、構築するものでもあったので、それ自体、実演的 performative であった。印刷物は、受動的な観察者や目撃者ではなく、参加者や権威者、批評家となる政治主体にアピールし、かつ彼らを構成した。クロムウェル時代の印刷物は、チャールズ1世時代の仮面劇、肖像画、儀礼の宮廷的・貴族的性格を変え、ひいてはチャールズ2世に引き継がれる文化形態を複雑にし、改変させた」⁽²³⁾。

こうしたクロムウェル時代の意味は、研究史上、適切に位置づけられたとは言えなかった。従来の研究者、とくに文学批評家、歴史家、美術史家はクロムウェルのイメージや表象を組上に載せることが少なく、むしろ軽視してきた。「研究者は、従来、17世紀中期の危機の文脈においてオリヴァー・クロムウェルの意味と影響を論じてきた。しかし、文学批評家、歴史家、美術史家たちは等しく、同時代人によるクロムウェル表象をほとんど無視してきた。文学研究者は、広範な君主の図像を探究したが、どの研究であっても、国家の非君主長としてユニークで、論争的となるクロムウェルの表象を取り扱うことがなかった」⁽²⁴⁾。

それでは、1970年以降に有力になった修正主義の研究者は、どうだろうか。彼らは、内戦による社会的断絶という見方に異議を唱える一方で、図像資料なども積極的に取り上げ、新たに政治文化研究を開拓してきた。しかし、彼らはクロムウェルや共和国の表象を積極的に取り扱うことが少なく、それらの意義も正当に位置づけられていないのが現状である。「修正主義者は、内戦の長期にわたる社会的・政治的・経済的原因に疑問を差し挟んできたが、最近では、国政論をめぐる問題および、国政と文化意識との関連性に疑問を差し挟むようになった。17世紀中期の危機を導き出し、あるいはそこから出現する文化的相違というものは存在したのか？……文化意識の問題は、1650年代について一層議論が分かれている。共和国は、肖像や儀礼、シンボルによって文化的に『発明』されたのか、それとも君主的イメージが支配し続けたのだろうか？」⁽²⁵⁾。ノッパーズは、研究史の分裂状態に注意を促し、次のように続けた。「クロムウェル自身は、君主的肖像画や儀礼を模倣した、名称以外では国王だったのか、それとも聖像破壊的・改革的衝動をずっと持ち続けたのか？」⁽²⁶⁾。

彼女は、こうした問いを掲げて、研究史の分裂状態を指摘した。修正主義者の研究は、なるほど初期ステュアート期の静態的な分析には有効であったが、ピューリタン革命期のような動的な局面には適していなかった。そのため、クロムウェル時代の政治文化の特徴は、これまで十分に理解されなかった。ノッパーズが念頭に置いた修正主義とは、マルコム・スマッツやケヴィン・シャー

プの研究である⁽²⁷⁾。彼らの「研究は、宮廷・地方の分裂図式に挑戦し、内向きで島国的なチャールズ1世時代の宮廷文化という伝統的見解を覆した。しかし、二極モデルや固定的図式を崩したことは、内戦期やその後に重要な文化的相違や変化があったことを、何ら意味していない。もしチャールズ1世のイメージが、かつて考えられたよりも、ずっと広範に普及していたとしても、そのイメージは、依然として神権や王権に属するものであった。チャールズ1世は、教会や国家において肖像画と儀礼を作り上げ、指示した。このような形式での国王批評は緩和され、遠まわしになった。同じような種類の広く普及したオリヴァークロムウエルの印刷物イメージと比較するならば、チャールズ1世のイメージは、少なくとも1640年代までは、著しく宮廷に根ざし、階層秩序的であった。私見では、クロムウエルの印刷物イメージは、連続性だけでなく、正真正銘の変質や変化を示しているのである」⁽²⁸⁾。

こうしたクロムウエル時代の特徴を捉えるため、ノッパーズは、方法的な視点を求めた。彼女が援用したのは、アメリカ在住のイングランド近世史家デイヴィッド・クレッシーの読み書き論や「アナール派第4世代の旗手」ロジェ・シャルチエのテキスト論であった⁽²⁹⁾。特にシャルチエについて、次のような積極的評価を与えた。「印刷されたテキストの生産、流通、受容の過程を追う中で、私は、近世フランスの印刷文化史に関するロジェ・シャルチエの幅広い仕事にも依拠した。わけてもシャルチエは、生産と受容の間、公共意識を形成する努力とそれ自体(とらえ難い)あの民衆の見解の間を区別する、「横領 appropriation」という有益な概念を強調したのである」⁽³⁰⁾。シャルチエによれば、印刷物は、それ自体の意図を離れて、受容者によって深読みされ、時には曲解や誤解もあって、新たな解釈を施される。それが「横領」の意味合いであった。

こうした目的や視点を掲げるノッパーズの著作は、第1章『チャールズ王の棺、クロムウエルの王冠』——国王派の風刺画と国王殺し」、第2章「肖像画、印刷物、共和派の英雄」、第3章『勝ち誇って馬に乗る』——初期プロテクター期の儀式と印刷物」、第4章「後期プロテクター期の競い合うクロムウエル像」、第5章『彼が死ぬのを見た』——クロムウエルの死と葬儀」、第6章「初期王政復古の儀式と印刷物、刑罰」、という構成をとっている。第1章・第2章は、1649年のチャールズ1世の処刑前後から共和国成立期の印刷文化を扱い、国王派と議会派それぞれの印刷物の利用法を検討する。第3章・第4章は、1653年以降のプロテクター期における印刷物と政治文化を対象に、初期ステュアート期とは異なる、この時期の独自性を浮き彫りにする。第5章・第6章は、1658

年のクロムウェル死去から王政復古期までの印刷物と政治文化を扱い、クロムウェル時代の変化が後の時代にも影響したことを明らかにしている。

本書でポイントになるのは、クロムウェル表象をめぐって国王派と議会派の間で繰り広げられた「横領」のプロセスと、プロテクター期における儀式や印刷文化の独自性である。主として第1章と第2章が前者のテーマを、第3章と第4章が後者のテーマを取り上げている。

前者について述べると、1640年代末からクロムウェル表象は、盛んに登場するようになった。注目すべきは、「国王派が民衆的形式を、共和派が宮廷的形式を用いる」⁽³¹⁾という特色である。具体例をあげると、図1は、オランダ人が描いた1649年のクロムウェル批判の版画で、国王派が用いた「王位篡奪者」クロムウェルのイメージを分かりやすく示している。国王派は、広く民衆に流布したカリカチュアの手法を意図的に用いることによって、「クロムウェルの狡猾で自己中心的な行動を暴き出す」のであった⁽³²⁾。それに対して、議会側が提示したのは、1649年の有名なクロムウェルの肖像画（図2）に代表されるものである。画家ロバート・ウォーカーによって描かれたこの肖像画は、当時の宮廷的・貴族的手法にのっとり描かれており、彼が宮廷画家ヴァン・ダイクの絵から多くを学び、その手法を取り入れたことが推察される。ヴァン・ダイクは、チャールズ1世お気に入りの画家で、有名な国王の肖像画を多数残しているが、ウォーカーによるクロムウェル像のモデルとなったのは、廷臣トマス・ウェントワースの1636年の肖像画であったと指摘される（図3）⁽³³⁾。ウォーカーは、宮廷画家の手法を用いて、議会派のリーダー・クロムウェルを高貴に描くという「横領」を果たしたことになるだろう。

肖像画は一点限りのものだから、この時代には社会的影響力があまりなかったと考えられる。肖像画が社会的に意味をもつのは、それが模倣され複製されて、繰り返し印刷物に表れた場合である。事実、ウォーカーの肖像画は、改作を伴いながら、その後のパンフレットで繰り返し登場することになった。著作権などなかった17世紀には、こうした模倣や複製が許されたのである。図4は、1651年のウースターの戦勝直後に出版された議会派側のパンフレットの挿絵で、明らかにウォーカーの肖像画が転用されていると分かる⁽³⁴⁾。ただし、改作はクロムウェルに好意的なものばかりではなかった。図5のクロムウェル像は、1663年の国王側パンフレットによって中傷的に用いられ、首に巻き付いた縄は王政復古後に彼の遺体が墓から暴きだされ、首と体が切断されたという悲惨な報復を想起させるものだった⁽³⁵⁾。このクロムウェル像には、国王派がウォーカーの肖

像画を改作した「横領」のプロセスを見ることができる。ウォーカーの肖像画が宮廷画家の手法を「横領」したのと比べると、逆方向の「横領」である。このようにクロムウェルの表象は、好意的なものから批判的なものまで幅広く印刷物となり、広範に市場に出回った。それは、民衆的なレヴェルまで浸透し、表象の是非をめぐって活発な論議が巻き起こった。国王側がクロムウェルを「狡猾で自己中心的な」人物として描くため、民衆に親しまれたカリカチュアの手法を用いたことも、期せずして議論の場を広げることに貢献した。こうしてクロムウェルや共和国をめぐる議論の場は「公共圏 public sphere」成立への道を開いた、というのがノッパーズの主張である⁽³⁶⁾。彼女の言うように、クロムウェル表象をめぐる議論は、図像の解釈を支配者が一元的に統制しようとした初期ステュアート期には、到底考えられない出来事であった。

後者のテーマに移ろう。そこでは、1653年以降になされたプロテクター期の儀式が主として検討される。王位受諾を拒否したクロムウェルは、1657年6月、形式的に再度プロテクターへ就任するための儀式をウェストミンスターホールで挙行した。その様子は、批判者としてスコットランドから、この儀式にわざわざ参加したジェイムズ・フレイザーの貴重な記録によって知ることができる。「議会〔のメンバー〕は就任式のために整列した。プロテクターの厳粛な就任式は、大いなる華麗さと荘厳さをもって考案されていた。……これらの厳粛な儀式全体が挙行され、終了するとき、ある紋章官が、実際にトランペットを鳴らしている人を含む三人の奏者を従えて、彼に向けてイングランド、スコットランド、アイルランド、およびそこに属する領土のロード・プロテクターと宣言した。……再びトランペットが響き渡り、人々は何度か歓声と大声をあげて、神はロード・プロテクターを救い給うと叫んだ」⁽³⁷⁾。このように儀式は進められた。特筆すべきは、議会が就任式において大きな役割を果たしたことであろう。それは、初期ステュアート期の国王即位儀式や国王入市式などでは見られない特色であった。

これまで紹介したノッパーズの書物は、著者自身の言葉を借りれば、次のようにまとめることができる。「同時代人によるクロムウェル表象に関する本研究は、多くの方面で17世紀中期イングランドの政治文化についての以前の見解に挑戦している。歴史学における修正主義的研究と文学における共和主義への着目は、クロムウェルを君主と同一視する傾向にあった。しかしながら、クロムウェルの民衆的印刷物のイメージに関して繰り広げられた見方は、もっと複雑で変化する構図を描き出す。それは、君主的形式が大胆に見直されたこと、第

二プロテクター期であっても非君主的イメージが存続したこと、クロムウェルが実際に政権を握った前後の時期に、彼を民衆的人物として描いた国王派の印刷物が「期せずして」矛盾した役割を果たしたことなどを含意している」⁽³⁸⁾。

4 おわりに

以上、モリルの伝記的研究とノッパーズの政治文化的研究を中心に、最近のクロムウェル研究の動向を探ってきた。モリルの研究は、従来の「クロムウェル＝ピューリタンの英雄」というイメージを覆す、バランスの取れたクロムウェル像を描いていた。そこには軍事史やブリテン史に関する研究成果も反映されており、クロムウェルの新しい見方を提示するのに成功していると言ってよい。モリルは、これまで「修正主義者」と呼ばれていたが、本書や近年の研究を参照するかぎり、「ブリテン革命」論を主張するなど新しい方向を提起しており、修正主義以後の研究を切り開いているように思われる。

他方、ノッパーズの研究は、従来軽視されてきたクロムウェル時代の政治文化を扱ったものである。これまでの政治文化論は、近世史研究ではテューダー期や初期ステュアート期を舞台に修正主義の研究者を中心に進められてきた。そこでは静態的な分析が主流を占めていたが、ノッパーズは、クロムウェル時代という変動期を対象に、クロムウェル表象に見られる政治文化が議会や一般の人々をも巻き込んで、前の時代とは異なる展開を遂げた様子を活写した。彼女の議論は、修正主義が着手した政治文化研究を摂取しながらも、動態的な局面を取り上げ、結論的には修正主義を批判しており、注目に値する。ノッパーズの研究も、モリルの研究と同じく修正主義以後の研究に位置づけることができるだろう。

このようにモリルの研究とノッパーズの研究は、従来の見解に挑戦し、修正主義以後の研究を切り開いたという点で共通性がある。しかし、両者の間には、研究史的な文脈の違いが存在し、一方が政治史的、他方が政治文化史的という方法論上でも大きな開きがあるだろう。新しいクロムウェル研究である両者の接点を明確にすることが、本稿では十分にできなかったことを認め、両者の関連付けは今後の課題としておきたい。また、ノッパーズの研究は、政治文化論を、クロムウェル表象を中心に考察しており、ピューリタン革命期の多様な政治文化には及んでいない。革命期や共和政期に現れた他の表象（例えば、紋章やコインに示された国家表象など）を探ることも、重要なテーマとなるだろう。これらの点については、今後の課題として掲げておきたい。

註

- (1) B. Coward, *Oliver Cromwell*, London, 1991; P. Gaunt, *Oliver Cromwell*, Oxford, 1996; J. C. Davis, *Oliver Cromwell*, London, 2001.
- (2) 今井宏『クロムウェル』清水書院、1972年、澁谷浩『オリヴァー・クロムウェル』聖学院大学出版会、1996年。
- (3) クロムウェル生誕400年記念シンポジウム「クロムウェルと現代」については、『聖学院大学総合研究所紀要』17号、2000年3月を参照。田村秀夫編『クロムウェルとイギリス革命』聖学院大学出版会、1999年、清水雅夫『王冠のないイギリス王 オリバー・クロムウェル』リーベル出版、2007年。
- (4) J. Morrill, *Oliver Cromwell*, Oxford, 2007.
- (5) ジョン・モリル著、富田理恵訳「17世紀ブリテンの革命再考」、同著、後藤はる美訳「ブリテンの複合君主制 1500-1700年」『思想』964号、2004年8月を参照。
- (6) 二宮宏之「王の儀礼」柴田三千雄ほか編『世界史への問い7 権威と秩序』岩波書店、1990年、松浦義弘「フランス革命と王権」『岩波講座 天皇と王権を考える5 王権と儀礼』岩波書店、2002年、佐々木真「近世国家の統合力」松本彰・立石博高編『国民国家と帝国』山川出版社、2005年、指昭博編『王はいかに受け入れられたか——政治文化のイギリス史』刀水書房、2007年。指編著に対する私見は、岩井淳「書評 指昭博編『王はいかに受け入れられたか』」『イギリス哲学研究』32号、2009年3月を参照されたい。
- (7) S. Kelsey, *Inventing a Republic: The Political Culture of the English Commonwealth, 1649-53*, Manchester, 1997; S. Barber, *Regicide and Republicanism: Politics and Ethics in the English Revolution, 1646-59*, Edinburgh, 1998; D. Norbrook, *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-60*, Cambridge, 1999.
- (8) L. Knoppers, *Constructing Cromwell: Ceremony, Portrait, and Print, 1645-61*, Cambridge, 2000.
- (9) L. Knoppers, *Historicizing Milton*, Athens, Georgia, 1994.
- (10) イギリス史上の修正主義については、岩井淳・指昭博編『イギリス史の新潮流——修正主義の近世史』彩流社、2000年を参照されたい。
- (11) J. Morrill, *Cheshire, 1630-60*, Oxford, 1974; do.(ed.), *Revolt in the*

- Provinces*, London, 1976; do.(ed.), *The Scottish National Covenant in its British Perspective*, Edinburgh, 1990. 前掲「17世紀ブリテンの革命再考」
「ブリテンの複合君主制 1500-1700年」も参照。
- (12) J. Morrill, *The Nature of the English Revolution*, Harlow, 1993.
- (13) J. Morrill (ed.), *Oliver Cromwell and the English Revolution*, London, 1990.
- (14) J. Morrill, *Oliver Cromwell*, p.114.
- (15) *Ibid.*, Preface.
- (16) 第1章の叙述の元になったのは、J. Morrill, ‘The Making of Oliver Cromwell’, in his(ed.), *Oliver Cromwell and the English Revolution* であると思われる。
- (17) J. Morrill, *Oliver Cromwell*, p.90.
- (18) *Ibid.*, pp.120,122.
- (19) *Ibid.*, p.88.
- (20) *Ibid.*, p.62.
- (21) *Ibid.*, p.62.
- (22) L. Knoppers, *Constructing Cromwell*, p.2.
- (23) *Ibid.*, p.3.
- (24) *Ibid.*, pp.2-3.
- (25) *Ibid.*, pp.3-4. ノッパーズは、前者の代表例がケルシーの著作『共和国を発明する』（註(7)参照）で、後者の代表例がケヴィン・シャープの研究（註(27)参照）であると注記している。
- (26) *Ibid.*, p.4. 本書によれば、前者の代表例がロイ・シャーウッドの著作『オリヴァ・クロムウエル』で、後者の代表例がカワードの著作『オリヴァ・クロムウエル』（註(1)参照）である。
- (27) M. Smuts, *Court Culture and the Origins of a Royalist Tradition in Early Stuart England*, Philadelphia, 1987; K. Sharpe, *Politics and Ideas in Early Stuart England*, London, 1989; do., *The Personal Rule of Charles I*, New Haven, 1992.
- (28) L. Knoppers, *Constructing Cromwell*, p.4.
- (29) D. Cressy, *Literacy and the Social Order: Reading and Writing in Tudor and Stuart England*, Cambridge, 1980; Roger Chartier, *Lectures et lecteurs dans la France d’Ancien Régime*, Paris, 1987; do., *The Cultural*

Origins of the French Revolution, Durham, 1991〔松浦義弘訳『フランス革命の文化的起源』岩波書店、1994年〕。

(30) L. Knoppers, *Constructing Cromwell*, pp.5-6.

(31) *Ibid.*, p.6.

(32) *Ibid.*, pp.22-23.

(33) *Ibid.*, pp.32-34.

(34) *Ibid.*, pp.58-59.

(35) *Ibid.*, pp.188-190.

(36) *Ibid.*, p.4.

(37) James Fraser, “Triennial Travels…from June 1657 to June 1658”, quoted in L. Knoppers, *Constructing Cromwell*, p.1.

(38) L. Knoppers, *Constructing Cromwell*, p.8.

〔付記〕本稿の前半部は、『ピューリタニズム研究』3号（2009年2月）に掲載された岩井淳「書評 John Morrill, *Oliver Cromwell* (Oxford University Press, 2007)」を大幅に改稿したもので、後半部は、2008年10月12日に行われた近世イギリス史研究会例会での合評会「指昭博編『王はいかに受け入れられたか——政治文化のイギリス史』をめぐって」に触発されたものである。合評会の評者は、発表順に岩井、古谷大輔氏（大阪大学）、嶋中博章氏（関西大学）であった。

（2009年3月16日）

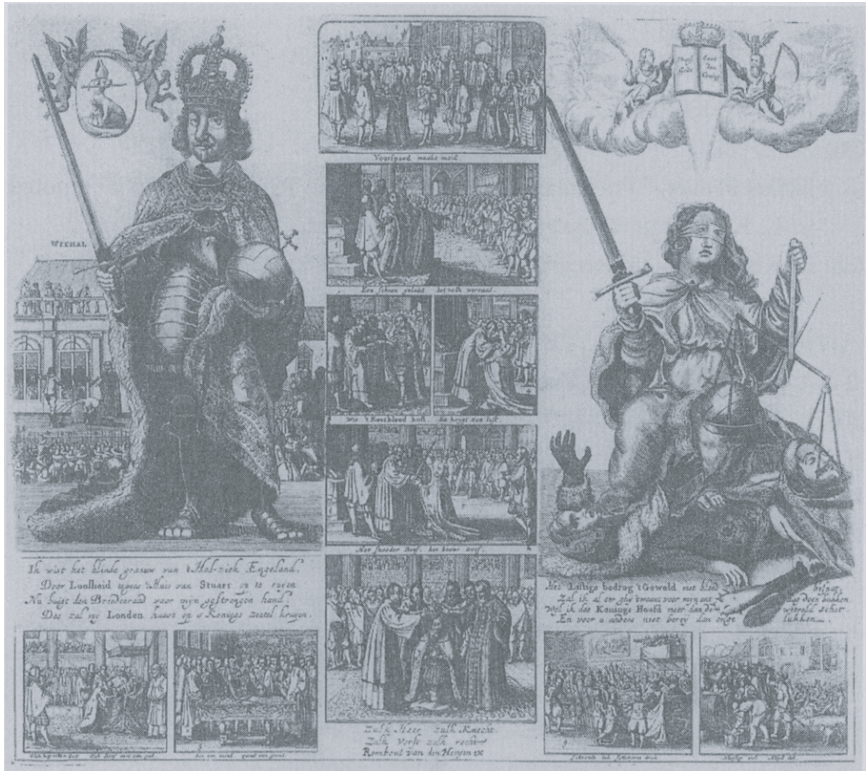


図1 オランダ人が描いたクロムウェル批判の版画（1649年）

出典：Romeyn de Hooghe, *The Coronation of Oliver Cromwell*, 1649, quoted in L. Knoppers, *Constructing Cromwell: Ceremony, Portrait, and Print, 1645-61*, Cambridge, 2000, p.22.

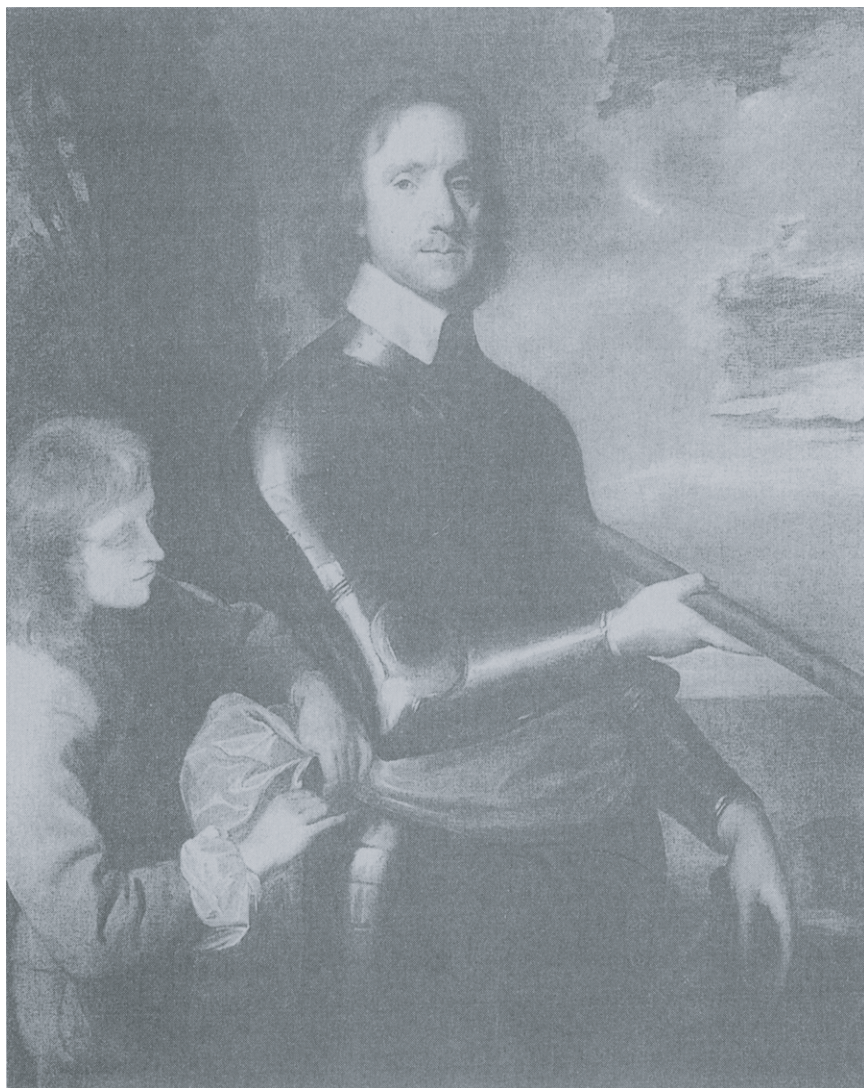


図2 クロムウェルの肖像画（1649年）

出典：Robert Walker, *Oliver Cromwell*, 1649, quoted in L. Knoppers, *Constructing Cromwell: Ceremony, Portrait, and Print, 1645-61*, Cambridge, 2000, p.33.

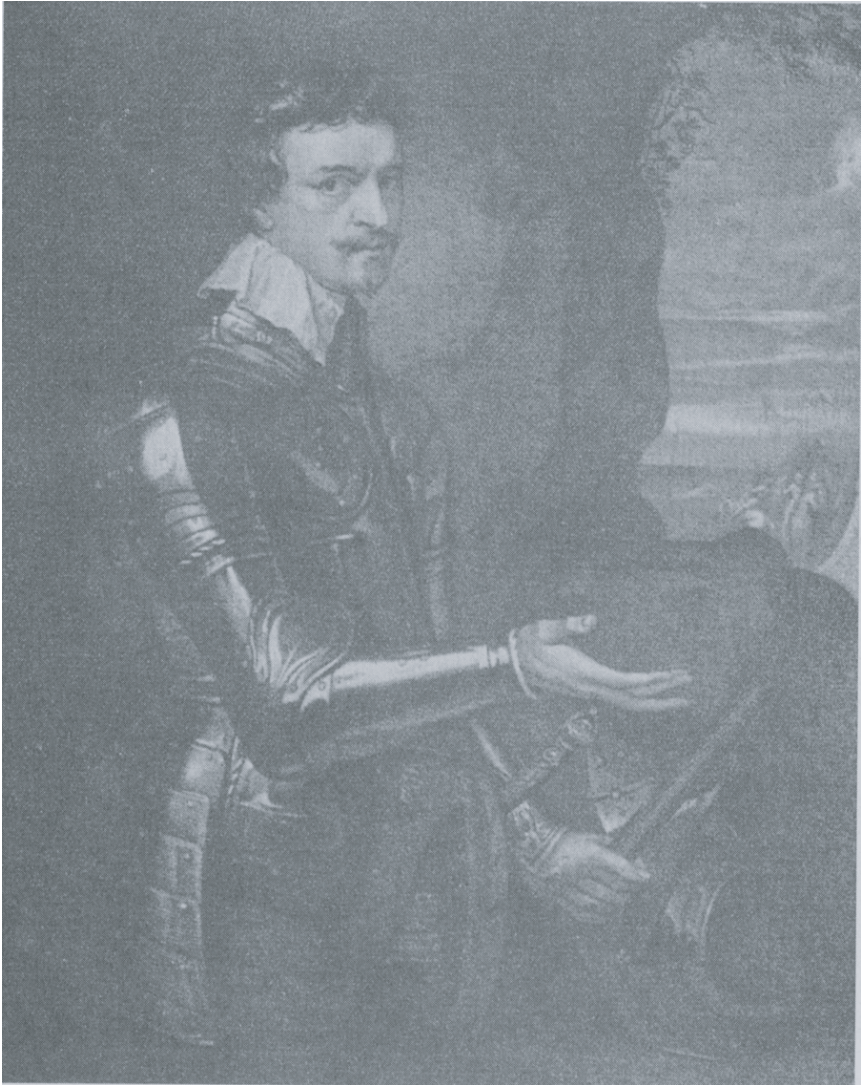
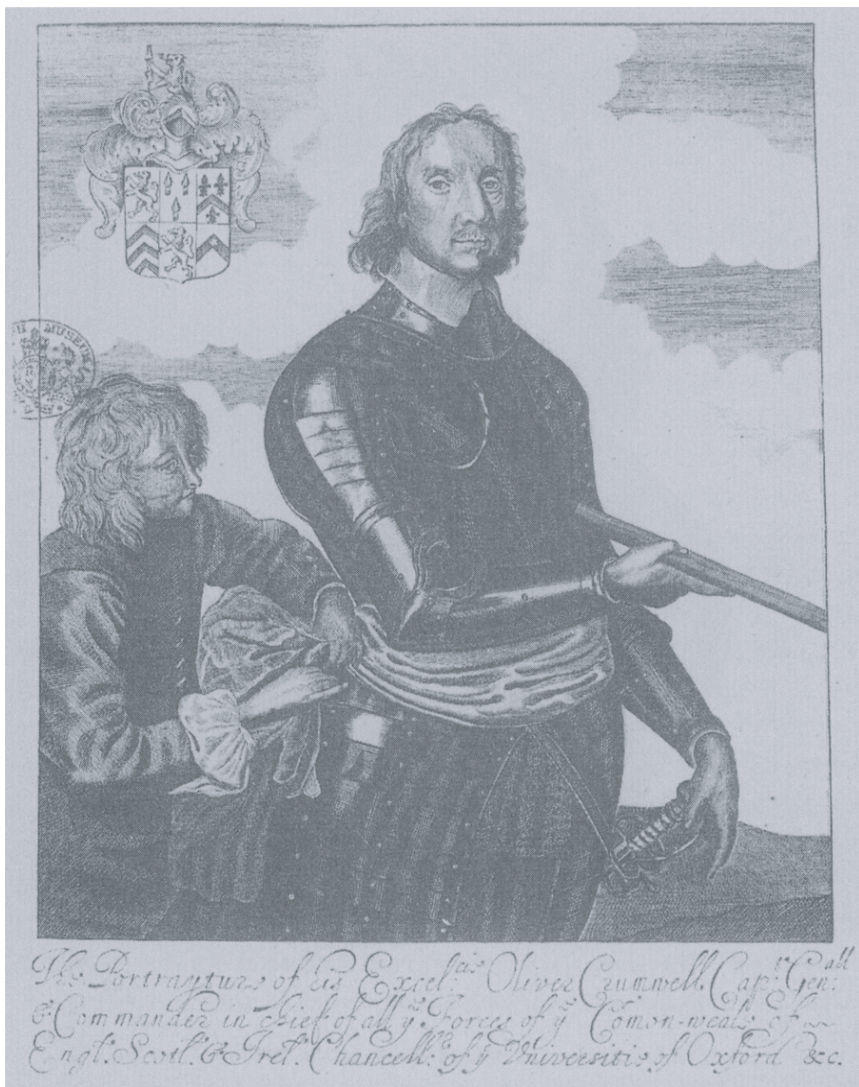


図3 廷臣トマス・ウェントワースの肖像画（1636年）

出典：C. V. Wedgwood, *Strafford, 1593-1641*, Westport, 1970, p.329.



The Portrayture of His Excellencie Oliver Cromwell, Cap^l Gen^l
& Commander in Chief of all y^e Forces of y^e Common-wealth of
Engl. Scot. & Irel. Chancell^r of y^e Universitie of Oxford &c.

図4 ウースターの戦勝直後に出版された議会派によるクロムウェルの版画(1651年)
出典：A Perfect List of all the Victories Obtained, 1651, quoted in L. Knoppers,
Constructing Cromwell: Ceremony, Portrait, and Print, 1645-61, Cambridge,
2000, p.59.



図5 批判者によるクロムウエルの版画（1663年）

出典：James Heath, *Flagellum*, 1663, quoted in L. Knoppers, *Constructing Cromwell: Ceremony, Portrait, and Print, 1645-61*, Cambridge, 2000, p.190.